

# ＜新＞植民地主義とマルチチュードのプロジェクト

——グローバル・コモンの共創に向けて——

水嶋一憲

## 1. ＜新＞植民地主義の問いの共有／グローバルな現在へ

私たちの生きている現在を積極的に定義することのできる言葉を見つけるのは、とても困難なことのように思える。今日、「現在」とは、＜ポスト＞という接頭辞のついたさまざまな術語——ポストモダン、ポストヒストリー、ポストポリティカル、ポストコロニアル、ポストフォーダイズム、等々——が交錯する、「ポスト・タイム」としか言いようのないものであるのかもしれない<sup>1)</sup>。けっして完了することのない移行こそが、現在を捉えることのできる、唯一可能な枠組みであるかのようだ。

私たちの現在を構成している諸種の＜ポスト＞のうち、とりわけポストコロニアルにおける＜ポスト＞は、そのような移行の未完了性と分ちがたく結びついたものである、と言えるだろう。それは、植民地主義を「過去の一時期」に封じ込めようとする忘却の力にあらがい、反植民地主義運動の系譜を再構築しながら、資本主義と植民地主義による支配と搾取のつづくグローバルな現在に、亡霊のように取り憑いているのである。また同時にこのポストコロニアルにおける＜ポスト＞は、グローバルな現在のただ中であって、未完のプロジェクトとしての脱植民地化と解放の政治の可能性を探るための肯定的な合図としても聴き取ることができるはずだ。

\*

＜グローバル化時代の植民地主義を問う＞という副題をもつ、西川長夫の新著『＜新＞植民地主義論』は、数世紀以上に及ぶ植民地主義の歴史を根底的に問いただすとともに、グローバルな現在における植民地主義の変質や変容を斬新な視角から浮き彫りにしようとする、大胆な試みである<sup>2)</sup>。かつて六〇年代に唱えられた「新植民地主義（ネオ・コロニアリズム）」や「低開発」の理論は、いまや皮肉にも（ポストアパルトヘイトの南アフリカに見られるように）、新自由主義政策がもたらした破壊的な社会的効果を「発展」の望ましきや不可避性の名の下に覆い隠そうとする政治的レトリックとして役立っていてもいる、という一面をもつことを否認することはできないだろう。あるいはまた冷戦崩壊後、グローバル化の加速度的な進行のなかで、かつての植民地主義的二分法に代わるものとして称揚されたクレオール化やハイブリディティ（異種混濁性）の概念が、後期資本主義の論理としていち早く建築やファッション、レストランのメニューなどに取り込まれ、またたく間に消費されてしまったことは記憶に新しいところだろう。むしろ、これらは植民地主義の終焉を例示するものではない。むしろその逆に、グローバルな現在における植民地主義の再編と深化に密接に関連した事態として捉え直されるべきものであろう。

西川氏が呈示する〈新〉植民地主義の概念は、こうしたグローバルな現在への理論的かつ実践的な介入をめざす、果敢な試みにほかならない。また、西川氏によるこの概念の粘り強い繰り返し上げ作業を支えてきたのが、「生きられた欺瞞」としての戦後日本の植民地状況への持続的な異和から発する怒りや闘争心と、変化や変容に対する若々しい好奇心や探究心であるということをあわせて再確認しておく必要があるだろう<sup>3)</sup>。端的に言って〈新〉植民地主義の概念は、旧来の植民地主義の「継続」を告発する立場や、かつての新植民地主義の立論とは一線を画しながら、植民地主義概念じたいの転換を図ろうとするものなのである。西川氏は、「グローバリゼーションと呼ばれ、とりわけ9・11以降により露骨な形をとり始めた、世界的変動の現実」を見据えながら、以下のように問いかけている。

世界的な貧富の格差と同時に、一国内における、あるいは一都市における格差の急激な増大、貧しい階層の急増、移民や出稼ぎ労働者の増大、社会主義国や第三世界における市場経済の席卷、テロ抑止に名を借りた少数民族や周辺部への武力介入と抑圧、世界の軍事基地化、世界的分業、世界の再編と中核-周辺という二極化の進行、等々……。こうした現実には、かつて一九六〇年代に「新植民地主義」として告発されていたものが、形を変え（植民地なき植民地主義）、より広範にそしてより深刻に機能し私たちの身に迫っていることを教えている。いまでは植民地主義が「継続」していることを指摘するだけでは足りないだろう。それは形を変え、より強力に、したがっていっそう危機的な形で世界を支配しているのだから。（……）私たちはここまで来て、植民地領有は植民地主義の特定の段階を示すものであって、植民地主義は必ずしも領土としての植民地を必要としないのではないか、という一見不条理な、だがおそらくはきわめて本質的な問いに直面せざるをえない。古典的な植民地概念は、形を変えて遍在する植民地と植民地主義を覆い隠す役割を果たしていなかっただろうか<sup>4)</sup>。

ここにさりげなく記されている「植民地なき植民地主義」という言葉は、グローバルな現在における資本主義の変容と連動した植民地主義の再編を考える上で、きわめて重要な示唆をもたらすものである<sup>5)</sup>。それと同時に西川氏のこうした洞察は、権力がつねにすでに植民地的性格を帯びていることを指摘する、「権力の植民地性」の概念と響き合うものであり、文明概念の根本や近代／ポスト近代の総体に向けた根底的な問いかけを呼び起こすものでもある。

9・11以後、野蛮はテロと名を変え、世界は二分されようとしている。それはより強化された中核と周辺の再編であるのか、そのような構造の終わりの始まりなのかは明らかではない。だがそこで私たちが問わなければならないものの正体は次第に明らかになっている。植民地主義を批判的に問うことは、国民国家と資本主義の両者の変容と、さらにはその共犯関係がもたらす差別と搾取の歴史を根底から問うことになるだろう。植民地主義を批判的に問うことは、文明概念の根本を問うことであり、五世紀続いた支配的な西欧文明と西欧文明を内面化した非西欧文明の全体を、したがって近代と呼ばれる時代の総体を、さらにはその中に生きる私自身を、根底的に問うことであると思う<sup>6)</sup>。

ここで提起されている根底的な問いかけは、近年、ラテンアメリカの社会学者や哲学者たちによって提唱されている「権力の植民地性（la colonialidad del poder）」の概念と接続するものであろう<sup>7)</sup>。「権力の植民地性」とは、ごく簡潔にいうなら、現在の世界内部に異なった知的システム間の堅固なヒエラルキーがなおも存続しているという現実を明示するために用いられる概念枠組みである。ゆえにまたそれは、「正統」と称される知識の生産形態を支えている支配構造を明るみに出そうとする試みに通じており、ヨーロッパによる植民地主義の経験や、植民者が被植民者に対して誇示し、押し付けてきた民族的・知的優位性に深く根ざした、知のヒエラルキーを問いただす作業とも連なっている。この意味で権力の植民地性に対する批判は、「たくさんの世界から成る世界を求めて」闘われてきたサバティスタの実践などとも結び合いながら、＜その内部でいくつもの世界が存在することのできるような唯一の世界を分有することは可能だろうか＞という問いを招き寄せずにはおかないのである<sup>8)</sup>。

とはいえ、この問いを肯定的なものとして受けとめるためには、現在の世界においても植民地主義によって打ち立てられてきた知のヒエラルキーは消え去っていない、いやそれどころか、植民地性のポストモダンの再編、いかえれば、知識のポスト植民地的再編が強力に押し進められているという事実と正面から向き合うことから始めなければならないだろう。またそのような取り組みをとおして「植民地なき植民地主義」の問いは、「権力の植民地性」とその再編への問いと縫い合わさり、＜ポスト領土的植民地主義＞の動態の批判的分析へと送り届けられることになるだろう。次節ではこれらの問いを踏まえ、またネグリ&ハート『＜帝国＞』<sup>9)</sup>の植民地主義分析に寄せられた批判に応答しながら、グローバルな現在における植民地主義のポストモダンの再編（西川氏の的確な表現をいま一度引くならば、「形を変え、より強力に、したがっていっそう危機的な形で世界を支配している」植民地主義）の解明を試みることにしたい。

## 2. ＜帝国＞と植民地主義のポストモダンの再編

ネグリ&ハートは『＜帝国＞』で、現在形成されつつあるグローバル秩序を諸種の領域を横断しつづくきりと浮かび上がらせ、それを＜帝国＞と名づけた。かつての帝国主義が、ある中心的な国民国家の主権とその拡張の論理に基本的にもとづくものであるとするならば、いま姿を現しつつあるのは、IMF（国際通貨基金）や世界銀行といった超国家的制度や資本主義大企業などとともに、支配的な国民国家すらをもその<sup>ノード</sup>節点として組み込んでしまうようなネットワーク状の権力であるということ——そうした視点にたつてネグリ&ハートは、この新たな主権形態を「帝国主義的」ではなく、「＜帝国＞的」と呼び直してみせたのである。

ネグリ&ハートが呈示する帝国主義から＜帝国＞への移行は、中心と外部の消滅（いかえれば、＜帝国＞の支配構造における権力の中心の不在と、資本による労働と生の実質的包摂の深化）によって特徴づけられる<sup>10)</sup>。これらのうち外部の不在は、外部の内部化に対応したものだ。すなわち、一般に消費や生産の回路の外部にあると想定されがちなサハラ以南のアフリカ地域でさえもが、じっさいには「債務」というかたちでグローバル資本の管理下に置かれているという事態に端的に表されているように、もはや「外部」は外延的にも内包的にも資本のも

とに包摂されてしまっているのである<sup>11)</sup>。

では、＜帝国＞への移行において、植民地主義はいかなる変貌を遂げているのだろうか。ネグリ&ハートはまず一方で、近代植民地主義への対抗戦略としての民族解放／民族自決の理念が陥った罫を明快に剔出してみせる。民族解放や解放的な国民主権という理念を掲げた闘争は、結局のところ新しい支配階級への闘争委任に転じてしまい、グローバル資本主義の組織化に貢献してしまった、というのが彼らの基本的判断である（「民族解放という毒入りのプレゼント」）。またもう一方で彼らは、ポストコロニアル理論の価値を評価しつつも、その一部の論者が礼賛する「差異の政治、流動性の政治、異種混交性の政治」がグローバル資本の戦略論理そのものと合致してしまうという逆説を鋭敏に察知している。そして、これらの陥穽や逆説を踏まえた上で、現在形成されつつあるグローバルな権力構造や政治秩序の傾向を明確に浮き彫りにしたいという意図をこめて、ネグリ&ハートは以下のように述べるのである。

ポスト植民地的な国民国家は資本主義市場のグローバルな機構のなかで、本質的かつ従属的な要素として機能しているのだ。（……）ポスト植民地的な国民国家の必然的な従属を説明する最後の環は、グローバルな資本の秩序である。正式な主権的国民国家を自らの秩序のなかに従属させるグローバルな資本主義の階層構造は、植民地主義的・帝国主義的な国際的支配の回路とは根本的に異なっている。植民地主義の終焉はまた、近代世界と近代的支配体制の終焉でもあった。近代植民地主義の終焉は、もちろん無条件の自由の時代を開くものではなく、グローバルな規模で機能する新しい支配の形態に道を譲ってしまったのである<sup>12)</sup>。

この一節に含まれている「植民地主義の終焉」というフレーズは、あまりに性急かつリニアな移行のイメージを読者にあたえかねないものであり、些か正確さを欠いた表現であると言わざるを得ない。ネグリ&ハートの強調する「グローバルな規模で機能する新しい支配の形態」、すなわち＜帝国＞において出来るのは、近代植民地主義の終焉であるというよりはむしろ、そのポスト近代的再編であると言い直した方が適切であろう。ポストモダン的なグローバル資本主義の到来と入れ替わりに植民地主義が消え去ったわけではなく、「権力の植民地性」はポスト植民地的な形態のもとで再編されている、とみなすべきなのだ<sup>13)</sup>。したがって、ネグリ&ハートが誤解を招くかたちで性急に書きつけた「近代植民地主義の終焉」というフレーズは、植民地主義の＜帝国＞的再編と読み替えられる必要がある、と指摘しておきたい。じっさい、後に見るように、『＜帝国＞』の続刊『マルチチュード』<sup>14)</sup>においてネグリ&ハートは、グローバルな南の共有財がグローバルな北の多国籍企業などによって私有化されていくプロセスを解明しながら、植民地主義のポストモダンの再編／知識のポストコロニアルな再編の批判的分析へと向かうことになるだろう。＜帝国＞のポストモダンな側面をそのポストコロニアルな側面から切り離して理解することはできない。＜帝国＞がポストモダンの特徴を有しているのは、近代性の変容が植民地性の変容を伴うという意味においてなのである<sup>15)</sup>。

＊

ここで再び西川長夫が導入した「植民地なき植民地主義」の概念を参照しつつ、ネグリ&ハ

ートの指し示した<帝国>への移行が、新植民地主義から<新>植民地主義への移行と重なり合うものであるという点を明らかにしておきたい。資本主義の変容という観点からすると、新植民地主義から<新>植民地主義への移行は、産業資本主義からポスト産業資本主義（後述するように、これは認知資本主義とも呼ばれる）への移行に照応したものとして捉えられる。また同じくこれを「開発と発展」をめぐる主流的言説の変遷に照らしてパラフレーズするなら、「工業開発／発展と新植民地主義」の対から「持続可能な開発／発展と<新>新植民地主義」の対への移行という図式が得られるだろう。

周知のように、1960 - 70年代にかけて第三世界諸国は、国家主導のもとで工業化を推進することにより、低開発からの離脱と経済的発展をめざした。生産の側面からこれを振り返るなら、そこでは、「物理的資本」（工業生産物）の増産と「自然的資本」（原材料）の開発・利用に照準が合わされていたと言えるだろう。だが、80年代以降、工業部門が牽引する「発展」の理念は弱まり、「持続可能な発展」の理念がそれに代わって強調されるようになる。またそのような動きと並行して、情報や知識そのものを生産力に転化するかたちで、知的資源を領有・活用することのできる「人的資本」の育成なしには、貧困からの脱却は不可能であるという考えが強まるようになった。たとえば、1992年にリオデジャネイロで開かれた国連環境開発会議で採択された「アジェンダ21」の第40章では、「持続可能な発展において各人は、広い意味で考えられる情報のユーザーであると同時にプロヴァイダーである」と明記されている<sup>16)</sup>。このような認識は基本的に、工業製品を生産する労働が価値の主たる源泉とみなされる産業資本主義から、情報や知識やコミュニケーションといった非物質的な生産物を創り出す労働が価値の主たる源泉として重視される認知資本主義への移行に対応したものである、と考えられる。

またこれとあわせて注目しておきたいのは、産業資本主義から認知資本主義へのヘゲモニーの移行に伴い、知識や情報がより重要な役割を演じるようになるのと軌を一にして、環境や生物多様性や伝統的知識といった「人類の共通遺産」の保全が「国際社会」で要求されるようになった、という点である。生物多様性や伝統的知識の保全や保護という問題は、植物の遺伝情報の所有権（非物質的な私的所有権）をめぐる近年の係争に顕著のように、グローバルな南の豊富な生物資源をグローバルな北の一握りの多国籍企業が——最先端のバイオテクノロジーや——特許権の取得を通じて独占的な私有財産にしてしまうという事態と密接に関連している。ネグリ&ハートは『マルチチュード』でバイオ所有権の合法化と独占をめぐるこのような「種子戦争」に言及しつつ、その<新>植民地主義的な搾取と支配の構造について、端的にこう述べている。

植物品種の数に関していえばグローバルな北は貧しいが、品種の特許の大部分は北が所有している。これに対してグローバルな南は品種の数こそ豊かだが、特許の点ではきわめて貧しい。そればかりか、北が所有する特許の多くは、南に生息する植物の遺伝物質から引き出された情報にもとづいている。北の富は、私有財産として利益を生むのに対し、南の富は人類共通の遺産とみなされているため、何の利益も生まない<sup>17)</sup>。

ここで明示されているように、北の多国籍企業は、生物多様性や遺伝資源と結びついた南の

伝統的知識の「保護」を通じて莫大な利益を取得しているわけである。そして、そのような収奪の構造をとおして明らかになるのは、持続的発展がその実、新植民地主義のポスト産業資本主義的再編を含意するものであり、〈新〉植民地主義の別称でもあるという点であろう。これに関して最近の具体的な事例をあげておけば、2001年に世界知的所有権機関（WIPO）が、「知的所有権、遺伝資源、伝統的知識、フォークロアに関する政府間委員会」を発足させている。また2003年にユネスコは「無形文化遺産の保護に関する条約」を採択し、そのなかで、「諸々の共同体、とくに原住民の共同体、また集団や場合によっては個人が、無形文化遺産の生産・保護・維持・再現において重要な役割を果たすことを通じて、文化の多様性と人類の創造性を豊かなものにすることに役立つ」と宣言した<sup>18)</sup>。このような仕組みをとおして、原住民や先住民が「伝統的知識と生物多様性の保護者」として「尊重」される一方で、彼／彼女らが何世代にもわたって用いてきた薬品や遺伝資源は、〈伝統的知識〉と〈科学的知識〉の二分法にもとづき、「国際社会」が認可する特許権をもつ多国籍企業によって専有されることになる。ローカルな共同体や原住民の活動に付与される価値は、かつての植民地主義のように物質的尺度に照らして計られるというよりは、遺伝情報や伝統的知識に含まれた富という非物質的尺度に照らして計られるわけである。そうしたローカルな文化や知識が価値を有するのは、つまるところ、それらがグローバル資本にとって有用な「持続可能な知識」である限りにおいてなのだ。私たちはここで、多文化主義の論理がもっとも苛烈な搾取の口実として機能してしまう場面に立ち会っているとと言えるだろう。

このように知識の生産に基礎を置くポストモダン資本主義（認知資本主義）は、生物多様性や遺伝情報を新たな植民地として開発・搾取し（「植民地なき植民地主義」）、司法システムによって認可された特許権をとおしてそれらを専有しているわけである（〈帝国〉のポストモダンな側面とポストコロニアルな側面の混交）。私たちはこれを「ポスト領土的植民地」の発見とその開発・搾取のプロセスとして把握することができるだろう<sup>19)</sup>。ポスト領土的植民地は、たとえそれがかつて近代植民地主義によって支配されていた領土内でも見出され、開発・搾取されつづけているとしても、それを管理運営する論理は、フォーディズム（工業製品等の物質的な財の生産に主軸を置く調整様式）ではなく、ポストフォーディズム（知識・情報・サービス・コミュニケーション等の非物質的な財の生産に主軸を置く調整様式）に立脚するものとなっている。というのも、領土や物質的富というよりは、遺伝情報や非西欧的な知のシステムに含まれている非物質的な富こそがそこでの領有対象であり、資本へと転化されるべき財であるからだ。逆にいえば、経済的に貧しいグローバルな南の豊かな遺伝資源の略奪と非西欧的な知のシステムの横領なしに、〈帝国〉のポストフォーディズム経済を再生産しつづけることは困難なわけである。ここでは、権力の植民地性が非物質的生産の命法に固有の新たな形態のもとで再編されているという点に留意しておきたい。その意味で〈新〉植民地主義は、かつての新植民地主義のポストフォーディズム的再編としても捉えうるのである。同じく「植民地なき植民地主義」は、ポスト領土的植民地の開発・搾取、いかえれば、ポスト領土的共有地のインテンシヴな囲い込みを含意するものとしても理解できるだろう。

\*

現在その強度をますます増しつづ進行している新自由主義的グローバリゼーションは、〈

新＞植民地主義と連動しながら人びとの共有財を私的に領有し、その生を不安定化することを通じて、無惨なまでの二極化や格差拡大をグローバルな規模でもたらしている。こうした「略奪による蓄積」<sup>20)</sup>によって駆動するグローバル資本主義の内部にありながら、それに抗する政治的主体性とその運動の新たな組織形態をどのようにして構想することができるだろうか。次節では、ネグリ&ハートが差し出すマルチチュードのプロジェクトを手がかりに、その可能性の一端を素描してみたい。

### 3. マルチチュードと＜共＞の構成プロジェクト

ネグリ&ハートは『＜帝国＞』で、いまや地球全体を覆い尽くしつつあるばかりか、人びとの生の奥深くにまで浸透しつつある＜帝国＞的権力（その意味でこれはグローバルな「生権力」とも呼ばれる）に抗する特異的かつ集団的な主体を「マルチチュード」と名指し、その多種多様な力と欲望にもとづくグローバル民主主義の可能性を探ろうと試みた。

『＜帝国＞』はその刊行以来、アカデミズムの枠を超えた強烈なインパクトを多方面にあたえているが、その一方で、数多くの批判も浴びせられている。それらのうち代表的なものの一つは、9・11の攻撃とそれにつづく対テロ戦争を踏まえた批判、すなわち、ブッシュ政権による単独行動主義な企てを通じて明らかになったのがアメリカ帝国主義への回帰にほかならない以上、『＜帝国＞』の予言は外れてしまったのではないか、というものである。これに対してネグリ&ハートはこう応じる——ブッシュ政権による単独行動主義な企てはまさにそれが帝国主義的なものであるがゆえに不可避的な失敗に行き着くことになるだろうし、現にそれは瀕死の状態にある。なぜなら、中心を持たない分散的なネットワーク権力によって構成された混合政体としての＜帝国＞こそが、現在のグローバル秩序を永きにわたって維持できる唯一の主権形態にほかならないからだ、と。逆に言えば、＜帝国＞のただ中であって、かつまた＜帝国＞に抗して理論化を行い、行動するためには——サパティスタがNAFTA（北米自由貿易協定）に対して、アルゼンチンのピケテロス運動がIMFに対して、そしてインドのナルマダ川ダム建設反対運動が世界銀行に対してそれぞれの仕方で抵抗を挑んだように——、＜帝国＞を構成する諸権力のネットワークと向き合うほかないのである。

同じく『＜帝国＞』のマルチチュード概念に対しても、それが「あまりに不確定で、あまりに詩的な」レヴェルにとどまっている、といった批判が寄せられてきた。これはネグリ&ハート自身の自己批判でもあり、彼らが続編を書く大きな動機となったものである。ただそうした批判に絡めて指摘しておきたいのは、彼らの基本的なスタンスが、「マルチチュードを形成せよ！」というスローガンを上から発することでもなければ、共有財産の略奪に抗する世界各地の闘争を「地球を引き受けるために奇跡的に立ち上がる「マルチチュード」といった単一の名称のもとに置いてしまうこと」<sup>21)</sup>でもない、という点だ。そうではなくて彼らは『＜帝国＞』から『マルチチュード』にかけて、数多くのローカルな場所で現行のグローバル秩序に対して異議を申し立てている、地球を横断するさまざまな運動や空間——1999年のシアトルへの結集以降のオルター・グローバリゼーション運動、ブラジルの土地なき農民の運動やボリビアのパリオでの自律性の諸実験などのラテンアメリカ社会運動<sup>22)</sup>、政治的コミュニケーション空間と

しての世界社会フォーラムの開設，等々——の内部で進行中の実践や理論化の作業と並走し，それら異なる闘争間のコミュニケーションや凝集点を求めながら，マルチチュードのプロジェクト構築に取り組んできたのである。

社会的な主体概念としてのマルチチュードは，まず一方で，単一のアイデンティティを指示する〈人民〉といった概念と区別され，もう一方で，均質的かつ受動的な社会的力を指示する〈大衆〉といった概念と区別される。同じく階級概念としてのマルチチュードは，〈労働者階級〉という概念——これは狭義では工業労働者のみを含意し（ゆえにそこからは農業やサービス等，その他の部門に従事する労働者は排除される），広義では賃金労働者を含意する（ゆえにそこからは貧者や学生，不払いの家事労働に従事する女性など，賃金収入のないすべての人々は排除される）——と区別される。これらとは異なり，マルチチュードは，多種多様な社会的生産（物質的な財の生産のみならず，コミュニケーション，さまざまな関係性，生の形態といった非物質的なものの生産をも含む）の担い手すべてを潜勢的に含む包括的な概念であり，さまざまな特異な差異からなる多数多様性を指示するとともに，そのようにつねに多数多様でありながらも共同で活動することのできるグローバル民主主義の構成主体を指し示す開かれた概念である，と言えるだろう。

『〈帝国〉』が第一次イラク戦争（湾岸戦争）とコソヴォ戦争のあいだに書かれたように，『マルチチュード』もおおむね，9・11の攻撃と第二次イラク戦争のあいだに執筆された。けれどももう一方で，世界が戦争の雲に覆われていたこの時期が，戦争の常態化と現行のグローバル化のあり方に反対するさまざまな運動が積極的に展開された時期でもあったということを改めて強調しておきたい。1999年シアトルでのWTO（世界貿易機関）閣僚会議に対する抗議行動から，ポルトアレグレやムンバイでの世界社会フォーラムの開催にいたるまで，ネグリ&ハートにならってより正確に言い表すなら，オルタナティブなグローバリゼーションを求める諸運動が，新自由主義的な世界秩序に抗する闘いと，戦争に抗する闘いを内的に結びつけてきた，ということに注目する必要がある。『マルチチュード』において色々な視角から詳しく分析されているように，メキシコの「サパティスタ国民解放軍」そしてまた「シアトルへの結集」以降現出した，新しいグローバルな闘争のサイクルは，各々の闘争の特異性やローカルな性質を否定することなく，共通のネットワークを織り上げているのであり，またそのような仕方ではマルチチュードを組織化している，と考えられるのである。

このようにマルチチュードの概念は，現行の武装した新自由主義的グローバリゼーションが力づくで押し通そうとする，「いまある世界こそが唯一可能な世界である」という〈指令語〉による封鎖を，「もう一つの世界は可能だ」というコール&レスポンスのうねりによって解除しつつ，多種多様な逃走線を引き，さまざまな実験的な可能性へと開かれたネットワークを織り上げるための〈パスワード（合言葉）〉として捕捉することができるだろう。別の言い方をすれば，マルチチュードは，グローバルな形象としては均質性（資本主義的グローバリゼーションが市場をとおして推進するような）か永続的な紛争状態（「文明の衝突」論が思い描くような）かという選択肢をずらすものであり，政治的組織化のモデルとしては統一性（伝統的な「(前衛)党」に特徴的であるような）か差異性（人種・ジェンダー・セクシュアリティといった，諸種の同一性の違いを重視する「アイデンティティ・ポリティクス」に特徴的であるような）かと



いう二者択一を転位させるものなのである。またさらに、現在のグローバル秩序のあり方に異議を申し立て、数多くのローカルな場所でグローバル・システムの民主化のための改革提言を行っている、地球を横断するさまざまな運動ネットワークを想起しつつパラフレーズするなら、マルチチュードとは、多数多様性と共通性の間の連続性にもとづくもの、つねに多数多様でありながらも共同で活動することのできるもの、つまりは、自律性と協働性の連結、内的な諸差異による＜共＞の創出を名指すものだと言えるだろう。

\*

＜共＞とは「ザ・コモン」の訳語である。これは「共同のもの」「共通のもの」「共有のもの」等を意味する言葉であるが、『マルチチュード』日本語版ではそれらすべての意味を込めて＜共＞という訳語があてられている。＜共＞はマルチチュードや民主主義と並ぶ、『マルチチュード』のキーワードのひとつである。より正確には、＜共＞はマルチチュードが分かち合い、渡し合うパスワードであると言い直すべきかもしれない。その意味でマルチチュードは、＜共＞を阻害・解体したり、それを私的に領有したりする諸力に抵抗する存在であり、さまざまな差異からなる＜共＞をその多様性のままに肯定する存在なのである。

なおそのさい強調しておかなければならないのは、＜共＞が＜公＞（＝「公共（パブリック）」）と区別される概念であるという点である。ネグリ&ハートは『マルチチュード』で、＜共＞の収奪（そしてそれと連動した無惨なまでの格差拡大や、生の不安定化）こそが世界中の人のびとの共通条件であるかのような新自由主義的グローバリゼーション下の過酷な現状を見据えながら、こう問いかけている——＜公共の財やサービスの民営化＝私有化に、これまで前提とされてきた＜公＞対＜私＞の対立構図に陥らずに抵抗するにはどうすればよいのだろうか＞、と<sup>23)</sup>。このように従来の問題設定の枠組みそのものを根底的に突き崩すような問いを提起しつつ彼らは、国家主権と結びついた＜公＞と私的所有権と結びついた＜私＞という、旧来の＜公＞対＜私＞の対立を超えた＜共＞の理論と実践を通じて、民営化＝私有化の強力な動きに抵抗するためのプロジェクト構築に挑んでいるのである。別の言い方をすれば、ネグリ&ハートはポスト自由主義的・ポスト社会主義的な視点に立ちながら、私的利益／公的利益の対立を乗り越えて、諸々の特異性が生産する＜共＞の利益の方へ向かおうとしているのである。＜共＞の利益とは、「国家の管理のもとで抽象化されることなく、社会的・生政治的生産の場で協働する諸々の特異性によって再領有される一般の利益のことであり、官僚の支配によってではなくマルチチュードによって民主的に管理運営される公共の利益のこと」<sup>24)</sup>にほかならない。それゆえまた、特許権や知的所有権の強化といった＜新＞植民地主義の領有戦略にもとづく、グローバルな南の共有財産や「共にある生」<sup>ライブ・イン・コモン</sup>の私有財産化、別の言葉でいえば、ポスト領土的植民地の開発・搾取に抗するためには、それらに対する自律的抵抗運動と＜共＞の再領有の企てが不可欠なのである。

労働の価値が時間的な尺度にもとづいて規定されていた近代の生産パラダイムとは異なり、非物質的および生政治的生産が主導権を握るポスト近代の生産パラダイムにおいては、価値が従来の尺度では測れないものになると同時に、＜共＞的なものとして分かちもたれる傾向にある。したがってまた今日においては、「搾取も時間の観点から理解することはできない。価値の生産を＜共＞の観点から理解しなければならぬと同様、搾取も＜共＞の収奪＝収用として

捉える必要がある。いいかえれば、いまや<共>が剰余価値の生じる場となったのだ<sup>25)</sup>。この<共>的な剰余こそが、<共>を私的な富として収奪し、しかもそれを逆に人びとを管理する手段に変質させようとするグローバルな政治体に対する、マルチチュードの闘いの基盤となるものなのである。

このように<共>の再領有を要求する立場にたちながら、ネグリ&ハートはマルチチュード概念を、「マルチチュードは何になることができるのか」という呼びかけのかたちで、すなわち、絶えざる生成変化のプロセスや、自律的かつ協動的な潜勢力との交渉というかたちで練り上げようとしてきたのだった。いかにして互いに異なる闘争や主体性が、各々の特異性を損なうことなく、新しい社会的関係の形成——いいかえれば、特異性と自律性、抵抗と構成的権力が織りなす民主的プロセスの構築——をめざす共同プロジェクトのために協働することができるのか。マルチチュードの概念は、こうした民主主義に対するラディカルで差し迫った問いと分ちがたく結びついているのである。

とはいえ、マルチチュードと<共>を互いに結びつけるネグリ&ハートの試みは、ユートピア的なファンタジーにすぎないという批判を招くかもしれない。だが言うまでもなく彼らは、マルチチュードが<共>の平面上にあるのみならず、国境線の上下を走る線によって織り上げられた、新たな搾取と経済的ヒエラルキーの地勢図の上に置かれていることをはっきりと認識している。

私たちはいわば、グローバルなアパルトヘイト体制のなかで生きているのだ。だがここで明確にすべきなのは、アパルトヘイトとは従属化された人びとが価値のない使い捨て可能なものとして切り捨てられる、単なる排除のシステムではないということである。今日のグローバルな<帝国>におけるアパルトヘイトは、かつての南アフリカと同様、ひと握りの人びとの富を大多数の人びとの労働と貧困を通じて恒久化する、階層的包含からなる生産システムにほかならない<sup>26)</sup>。

けれども先にそのいくつかの例にふれておいたように、そのような排除と包摂の動きと並行して、今日、<帝国>のただ中であって、<帝国>に抗する多種多様な異議申し立てと、それに対するオルタナティヴを提示する改革提言の運動が進行しているのも、またたしかなのである<sup>27)</sup>。私たちは、「反植民地・反グローバル化運動」という本日のテーマに含まれているハイフン、それら二つの運動の内的な連結を注視し、そこに孕まれている潜勢力をよりいっそう強力かつアクチュアルなものにしていかなければならないだろう。つまり、新自由主義的グローバル秩序に抗する、反グローバル化運動（より正確には、いまとは別のグローバル化を求めるオルター・グローバル化運動）は、「形を変え、より強力に、したがっていっそう危機的な形で世界を支配している」<新>植民地主義に抗する、反植民地運動と内的に結びついているのであり、またもう一方で「略奪による蓄積」に抗する反植民地運動は、民族自決／国家主権の閉域を突き破りながら、<共>の再領有を求めるオルター・グローバル化運動と内的に結びついているのである。このように反植民地運動と反グローバル化運動を結ぶ連結符は、グローバル・コモンの共創に向けて開かれた土台であり、共にある生に向けて私たちを運ぶプラットフォーム

でもあると指摘できるだろう<sup>28)</sup>。

#### 4. 「自分だけの部屋」と「共にある生」——グローバル・コモンの方へ

私たちはこれまで、西川氏が差し出した〈新〉植民地主義の概念を、ネグリ&ハートの〈帝国〉やマルチチュードの概念と繋ぎ合わせながら、〈帝国〉における植民地主義のポストモダンの再編や、反植民地運動と反グローバル化運動の内的な結合に連なるマルチチュードのプロジェクトについて考察してきた。

〈新〉植民地主義と新自由主義的グローバル化が目下、結託して進めている「略奪による蓄積」に抗するためには、マルチチュードによる〈共〉の構成プロジェクトを具体的な制度構築に結実させていく作業がぜひとも必要であろう。この最後の節では、そのような〈共〉の収奪に抗する、〈共〉の構成プロジェクトの一環として、「無条件かつ普遍的な保証所得」構想について考察しながら、グローバル・コモンの可能性を探究するための道筋を、開かれた問いというかたちで指し示しておきたい。

\*

先述したように、産業資本主義から認知資本主義への移行に伴い、資本主義的蓄積の土台もまた拡大・深化しているという点に留意しなければならない。資本主義的蓄積は、もはやたんに物質的財を生産する労働の搾取をその土台とするだけのものではなくっており、知識や情報やノウハウ、情動やコミュニケーション、文化やアイデンティティ、生命や健康といった社会的生そのものの生産にかかわる「生政治的労働」（ネグリ&ハート）の搾取、一言でいえば、生の諸形態の搾取をその土台とするものとなっているのである。富や搾取の源は、従来の資本／労働の関係をはみ出して、資本／生の関係へと新たに移行している、とみなすべきだろう<sup>29)</sup>。そして、資本と生のあいだのそうした新たな関係性において——別言すれば、「経済の生政治的転回」（クリスチャン・マラッツィ）において——、労働時間は富の尺度としての役割を果たさなくなり、雇用と失業のあいだの境界ゾーンが拡大している。プレカリアート（不安定階層）の拡大はその顕著な現れにほかならない<sup>30)</sup>。このような状況のなかで、資本の発するプレカリティ（不安定性）という指令によって捕獲されることなく、協働的創造性のための「自由時間」（マルクス）を再領有化することは、いかにして可能なのだろうか。

一般的にいて、かつてのケインズ主義的福祉国家は、完全雇用と雇用の連続性をめざしていたが、現在の労働市場の実態は、雇用／失業という二分法にはもはや収まり得ないものとなっている。就労と失業のあいだの境界域のなかで生きている人びと（従来の「失業者」と「被雇用者」のカテゴリーのいずれにも属さない、非正規／断続的労働に携わる不安定階層）の存在が常態化し、その数がますます増大しつづけているのだ。資本主義の変容と連動しつつ、ケインズ主義的福祉国家から新自由主義的グローバリゼーションへの移行において生じたこうした事態を前にして、私たちは完全雇用という理念への回帰を政治的・経済的なスローガンとして掲げ、その復興をノスタルジックに追い求めるべきなのだろうか。だが、そもそも完全雇用とは、規範化された賃労働をベースとした「悲しきユートピア」のことではなかっただろうか。（しかも、完全雇用は基本的に男性、それも規範的なカテゴリーに属する男性の完全雇用を意味

するものでしかなかった。)

してみれば、ポスト福祉国家におけるマルチチュードの闘争目標としては、賃労働による捕獲を意味する「完全雇用 (plein emploi)」と「雇用の連続性」の組み合わせよりも、自由時間のなかでの「充溢した活動 (plein activité)」とそれを最低限支える「収入の連続性」の組み合わせの方が、資本が吹き込む不安定性への恐れからプレカリアートを解放し、資本が強いる流動性を個人みずからの自由な選択にもとづく可動性として取り戻す可能性を拡げるという点においても、より大きな重要性と実効性を有するのではないか——かつて60-70年代のイタリアを中心に活発に展開された「オペライズモ (労働者主義)」の流れを汲む、経済学者・社会学者・哲学者・アクティヴィストたち (ネグリやアントネッラ・コルサーニ、マウリツィオ・ラツァラート、カルロ・ヴェルチェルローネ、ヤン＝ムーリエ・ブータンといった人びと) は、大筋においてこのような見地から、「保証所得」や「基本所得」の概念に働きかけ、それを構成的なプロセスとして練り上げようとしている<sup>31)</sup>。ごく大まかにいって、彼らが構想する保証所得は、就労をその条件や代償とはしないという点で、収入の権利を労働の強制と結びつける「ワークフェア」の考え方とは根本的に異なるものだ。またそれは、賃労働の規範性から排除されてきたすべての者たち (女性、学生、労働者、フリーター、失業者、障害者、移民、外国人労働者、等々) に対して等しく配分される、普遍的な所得である。

このような「無条件かつ普遍的な保証所得」は、経済の再社会化のためのラディカルな改革であり、労働の可動性と収入の安全性を積極的なかたちで結び合わせることでできる社会保障システムとして捉えられるだろう。またこの所得は、雇用／失業という二項対立や、賃労働にあたえられてきた中心的地位をずらしながら、資本主義的な労働の組織化が押しつけてくるものとは異なる新しいニーズや欲望、新しい生き方や社会的ネットワーク、アートやケアや政治的実践を創出するための時間と空間を確保し、切り拓くための開かれた土台でもあると考えられる。このような観点からすると、私たちは「保証所得」のことを——資本が下す指令やまたそれが吹き込む恐れから逃れて、人びとが生を再領有化するための土台となる所得であるという意味で——「<sup>バカオ</sup>生所得」と呼ぶことができるかもしれない<sup>32)</sup>。

\*

ケインズの友人としても知られるヴァージニア・ウルフは、1920年代の終わりに刊行された『自分だけの部屋』のなかで、「小説なり詩なりを書こうとするなら、年に五百ポンドの収入とドアに鍵のかかる部屋を持つ必要がある、という味もそっけもない結論」<sup>33)</sup>を繰り返し主張した。芸術作品の創造のための必要条件として「お金と自分だけの部屋の重要性」を強調し、「知的自由は物質的なものにかかっている」とまで極言する、ウルフのこのような考え方が、ロマン主義的観念からの決別を意味するものであるのは明らかであろう。また、それとあわせて指摘しておかなければならないのは、ウルフが繰り返しその重要性を強調する「一定の収入」が、賃金や利潤といった範疇を超えたもの、すなわち、賃労働の有無に関わらず、事前に取得される (いわば公的な) 収入を示唆しているという点だ<sup>34)</sup>。このような一定の収入こそが、賃労働の強制と生の不安定化をとおして日々生み出される、「恐れと苦々しさの毒」<sup>35)</sup>を消し去るためには、ぜひとも必要なものなのである。この意味で、ウルフが——とくに「女性」にとっての

その必要性を強調しつつ——示唆した「一定の収入」は、現在の——とくに「プレカリアート」の増大を前提にした——「無条件かつ普遍的な保証所得」構想を予描するものでもある、と言えるだろう<sup>36)</sup>。

ところで、ガーヤットリー・C・スピヴァクは、この『自分だけの部屋』というフィクション的な講演を精読しつつ、そこで呈示された「一定の収入」が有する、もう一つの側面に強烈な光をあてている。ウルフのテキストのなかで、「メアリー・ビートン」という名をあたえられた語り手は、「一定の収入がどんなに大きな気持ちの変化をもたらすかは驚くべきほどだわ（…）世の中のどんな力も、私の五百ポンドを私から取り上げることはできないのです」と述べているが、実のところこの「年五百ポンドの収入」は、彼女と同名の伯母が「ボンベイで馬に乗って散策中に落馬して亡くな」ったために贈られることになった遺産によるものなのだ。つまり、ここでの話者であるメアリー・ビートンを日々の不安定な労働にまつわる「恐れと苦々しさの毒」から解き放ってくれたのは、帝国主義のおかげで得られた収入にはかならないわけである。この点に関して、スピヴァクはウルフのテキストの複雑な語りを用心深く読み解きながら、こう記している。

帝国主義のおかげで自活しているわたし、メアリー・ビートンが、もし書くことができるものなら、そのときにはわたしは書くだろう。書かれることのなかった理想的な講演の冒頭に置かれる前提は、彼らが言うように「他のすべてのことは対等なのだから」、男性と女性とは文学の営為において対等な参画者であるというものであるべきだ、と。全体の構造はそのままにしておいて、この最後の文をつぎのように書き改めてみよう。新植民地主義とグローバリゼーションのおかげで自活しているわたし、メアリー・ビートンが、もし書くことができるものなら、そのときにはわたしは書くだろう。「開発のなかの女性」および「ジェンダーと開発」の宣言文の冒頭に置かれる前提は、世界のあらゆる国からやって来たグローバルな支配的中心部にいる女性たちと世界のいたるところで貧困に苦しんでいる女性たちとは対等でありうるというものであるべきだ、と。ウルフのテキストの修辭的な構えは、この文が平叙文になることを許さない<sup>37)</sup>。

このようにスピヴァクは、「ウルフのテキストの修辭的な構え」に注意深く寄り添いながら、「女性」という一般化された名称を確立しようとする、合衆国を中心としたトランスナショナルなフェミニズムを批判している。なぜなら、言うまでもなく権力の諸関係は、北の女性と南の女性のあいだを横切っているのと同じく、北の内部と南の内部をも横切ってもいるのだから、均質的な統一体としての「女性」を打ち立てようとする身振りそのものが、一種の政治的な隠蔽と抑圧に加担することにつながってしまうからだ。しかしまたその一方で、「共通通貨がなくては、いかなる運動も進展することはできない」以上、「女性」という名辞へと向かう「一般化の衝動を、それに抹消線をほどこして警告として眼に見えるかたちにしたうえで、保ちつづければならない」<sup>38)</sup>。「諸々の集合体 (collectivities)」を構成しようとするあらゆる政治は、ウルフのテキストのこうした「修辭的な構え」を取り入れ、「テキストが一步進もうとするたびごとに、それが平叙文となることを押しとどめる」その働きを絶えず作動させなければなら

いだろう。

また同じくスピヴァクは、ウルフのテキストの話者が謎めいた仕方で語る「シェイクスピアの妹」のメタファーについて、私たちの注意を喚起している。『自分だけの部屋』の最後の箇所を引いておこう。

私はこの講演の中で、シェイクスピアには一人の妹がいた、と申しました。(……)ところで、一語も書くことなく、十字路に埋められた、この詩人はなおも生きている、と私は信じているのです。彼女はあなた方の中に、私の中に、それから、お皿を洗ったり子供たちを寝かしつけているために、今夜ここにはお出でにならない他の多くの女性たちの中に、生きているのです。(……)何故なら、私は次のように信じているのですから——もし私たちがあと一世紀ほど生き——私は真の生命である共有の生命のことを意味しているのです、私たちが個々人として生きる、小さな別々の生命のことを意味しているではありません——一人々々が年に五百ポンドの収入と自分だけの部屋を持つようになったら、もし思うところをそのまま書く自由と勇気を身につけるようになったら、(……)その時こそ、機会が到来し、シェイクスピアの妹だった亡き詩人は、これまでしばしば脱ぎ棄ててきた肉体をまとうでしょう。(……)私たちが彼女のために努力すれば [if we worked for her]、彼女は現れるでしょうし、かつ、たとえ貧しく無名であろうと、そのように努力することは [so to work even in poverty and obscurity]、やり甲斐のあることだ、と私は主張したいのです<sup>39)</sup>。

ここで「努力する」と訳されている“work”という動詞は、当然ながら、「仕事をする」・「働く」・「労働する」などと訳すことも可能である。「彼女のために努力／労働すること」——この〈ワーク〉が、金銭の取得を目指して行われる行為には帰着しない何かを指示するものであるという点は明白だろう。「私たちが彼女のために努力／労働すれば、彼女は現れるでしょうし、かつ、たとえ貧しく無名であろうと、そのように努力／労働することは、やり甲斐のあることだ、と私は主張したいのです」。ここで述べられている〈ワーク〉は、強制ではなく自発的な欲望にもとづくものであり、また、「たとえ貧しく無名であろうと」という半限定的な言葉が付け加えられていることから明らかなように、経済的に支配的な立場にある者が〈弱者〉に差し伸べる支援の類いに還元されるものでもない。そうではなくてそれは、スピヴァクの鋭い読みを踏まえて言えば、「あるひとつの集合体の形成原理」であるとともに、「彼女の亡霊に取り憑かれて、彼女によって他者化されることへの祈願」でもある。この点を指摘した上でスピヴァクは、そのようなくワークを——今日、グローバルな南で展開されている対抗グローバルバリエーションのアクティヴィズムとも連携した——「オープンプラン・フィールドワーク」と暫定的に呼んでいる<sup>40)</sup>。賃労働と雇用の中心性をずらす、無条件かつ普遍的な保証所得は、こうしたオープンプラン・フィールドワークに対して開かれたものでなければならぬだろう。同じくまた、グローバルな南の伝統的知識を私有化しつつ進行している〈新〉植民地主義に抗する企てにとっても（そして、そうした〈新〉植民地主義を正当化する口実として機能している、新自由主義的な多文化主義の論理を根底から掘り崩そうとする企てにとっても）、こ

の「下から学ぶことを学ぶ」オープンプラン・フィールドワークの試みはきわめて重要なレッスンをあたえてくれるものと考えられる。

\*

＜新＞植民地主義と新自由主義がグローバルな規模で手に手を取って進めている＜共＞の収奪と生の不安定化に抗するためには、統一性や均質性にけっして収斂することのない、さまざまの結びつきや多数多様な組み合わせからなる＜共＞を、あらゆる領域やレベルにおいて政治的に構成することが不可欠である。マルチチュードのプロジェクトや「無条件かつ普遍的な保証所得」構想は、そのようなコモンライフ・イン・コモンの共創をめざす実験にほかならない。またそれらは、特権的な場所から発信される尊大な試みの類いに横滑りしてしまうことなく、さまざまに異なる位置性のネットワークからなる政治を作動させつづけるために、オープンプラン・フィールドワークとたえず連携する必要があるだろう。

マルチチュードのプロジェクトは、国民や国家といった排除を前提とした同一性を突き崩しながら、グローバル・コモンや共にある生の創出に向けて、さまざまの問いを開くものである。このオープンプランのプロジェクトを構成する多種多様な闘争は、各々の闘争の特異性を否定し破壊しあうことなく、それぞれが有する政治的欲望や支配構造への敵対性を相互に翻訳しコミュニケーションし合いながら、互いの能力や力を増大させるものでなければならない。＜新＞植民地主義と連動した新自由主義的グローバリゼーションによって＜共＞の私有化が強烈に押し進められるとともに、＜帝国＞的生権力によって人びとの生が剥き出しにされ、生きることじたいが不安定な労働になっているのだとすれば、そのような現実を別の生のための基盤に変えるような、共同的な想像力と創造性がいまこそ強く求められているのではないだろうか。「自分だけの部屋」と「共にある生」は互いに他を含み合ったまま、特異性と多数多様性からなるグローバル・コモンライフ・イン・コモンの共創のためのスペース／非国家的な公共圏に向けて開け放たれているのである。

## 注

- 1) Sendro Mezzadra and Federico Rahola, "The Postcolonial Condition: a few notes on the quality of historical time in the global present", *Postcolonial Text*, 2 (1), 2006. (<http://postcolonial.org/index.php/pct/article/view/393/139>)
- 2) 西川長夫『＜新＞植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、2006年。
- 3) 西川長夫「植民地主義の現在を問う（聞き手＝岩崎稔）」、『週刊読書人』第2655号、2006年を参照。
- 4) 『＜新＞植民地主義論』、267-268頁。
- 5) かつての「新植民地主義」の概念と対比させつつ、グローバル化時代の「＜新＞植民地主義」ないしは「植民地なき植民地主義」について、西川氏はさらにこう述べている。「旧来の「新植民地主義」の概念は、(……) 古典的な「民族自決」の原則に従い、一つの領域国家（旧植民地）と他の領域国家（旧宗主国）との支配—従属関係を示しています。これに対して新しい「＜新＞植民地主義」は領域的な支配（占領，入植）を必要としない。いわば「植民地なき植民地主義」です。(……) ただし、私たちはここでの主役はもはや国家ではなく資本であること、またその資本が変質しはじめていることを言わなければなりません」（同書、50頁）。
- 6) 同書、30頁。
- 7) 「権力の植民地性」の概念やカテゴリーについては、さしあたり、Anibal Quijano, "Coloniality of

- Power, Eurocentrism, and Latin America”, *Nepantla: Views from South*, 1 (3), 2000, pp.533-580を参照。また、〈グローバリゼーションと脱植民地の選択〉を中心テーマとする *Cultural Studies* 誌の特別号 (*Cultural Studies* 21 (2&3), Routledge, 2007) が、本稿脱稿後に刊行された。これには、Walter D. Mignoloの序論「権力の植民地性と脱植民地の思考」や Anibal Quijanoの論文「植民地性と近代性／合理性」、そしてこのあと本稿でその仏訳を参照することになる Santiago Castro-Gómezの論文「〈帝国〉の失われた章」の英訳を始め、重要かつ挑戦的な論文が多数収録されている。
- 8) Santiago Castro-Gómez, “Le Chapitre manquant d’ *Empire*”, *Multitudes* no.26, 2006, pp.27-49を参照。
- 9) Michael Hardt and Antonio Negri, *Empire*, Harvard UP, 2000. (アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート『〈帝国〉』水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳、以文社、2003年)
- 10) 〈帝国〉への移行に孕まれた理論的・実践的諸問題をめぐるより詳細な分析については、拙稿「帝国論の新展開——マルチチュードの共闘の場を求めて」『史資料ハブ地域文化研究』、2004年、23-33頁を参照。
- 11) 付言しておけば、ポストコロニアル研究は、この内部化のプロセスを論証しようとするものであるという点で、『〈帝国〉』にも大きな理論的示唆をあたえている。「資本にとって欠陥のあるもの」とみなされる生活様式も、それらの「欠陥」が資本によって管理された領域の外部ではなくてその内部にあると理解する限りで、強力な非資本主義的プロジェクトの源泉たりうるものであるということ——G・C・スピヴァクの一連の仕事を始めとするポストコロニアル研究から『〈帝国〉』が汲み取った理論的かつ実践的なレッスンの一つはこれである。
- 12) *Empire*, pp.133-134. (『〈帝国〉』、179-180頁)
- 13) Castro-Gómez, “Le Chapitre manquant d’ *Empire*”による的確な批判を参照。
- 14) Michael Hardt and Antonio Negri, *Multitude: war and democracy in the Age of Empire*, Penguin Press, 2004. (アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート『マルチチュード——〈帝国〉時代の戦争と民主主義』(上)(下) 幾島幸子訳、水嶋一憲・市田良彦監修、NHK出版、2005年)
- 15) Castro-Gómez, *op.cit.*, p.34. またそのさい正確を期すために確認しておきたいのは、植民地性が近代性を構成する現象であり、その派生物ではなかったのと同じく、ポスト植民地性はポスト近代性を構成する現象として把握されなければならないという点である。
- 16) <http://www.un.org/esa/sustdev/documents/agenda21/english/agenda21chapter40.htm>
- 17) *Multitude*, p.183. (『マルチチュード』(上)、296頁)
- 18) <http://www.unesco.jp/contents/isan/intangible.html>
- 19) Castro-Gómez, *op.cit.*, p.45. また Vandana Shiva, *Biopiracy: the plunder of nature and knowledge, Between the lines*, 1997. (バンダナ・シバ『バイオパイラシー』松本文二訳、緑風出版、2002年) および、Catherine Waldby and Robert Mitchell, *Tissue Economies*, Duke UP, 2006をも参照。
- 20) David Harvey, *New Imperialism*, Oxford UP, 2003 (『ニュー・インペリアルイズム』本橋哲也訳、青木書店、2005年) および、D. Harvey, *A Brief History of Neoliberalism*, Oxford UP, 2005 (『新自由主義』渡辺治監訳、作品社、2007年)を参照。
- 21) D. Harvey, *New Imperialism*, p.169 (『ニュー・インペリアルイズム』、170頁)
- 22) 廣瀬純『闘争の最小回路』、人文書院、2006年を参照。
- 23) 拙稿「愛が〈共〉であらんことを——マルチチュードのプロジェクトのために」、『現代思想』33 (12)、青土社、2005年、92-101頁を参照。
- 24) *Multitude*, p.206. (『マルチチュード』(下)、40頁)
- 25) *ibid.*, p.150. (『マルチチュード』(上)、248頁)
- 26) *ibid.*, pp.166-167. (『マルチチュード』(上)、272頁)
- 27) これらの運動については、さしあたり、『マルチチュード』3-2「グローバル・システムの改革提言」のパートを参照。



- 28) 最近のフランスで起こった一連の出来事(マルクスをもじって、これらを<フランスにおける分子的な内乱/階級闘争>と呼ぶことは適切だろうか)を例にとるなら、2005年秋にパリの郊外で発生した「暴動」(主として、北・西アフリカからの移民家庭に生まれた若者たちによる蜂起)と、その数ヶ月後の2006年春から始まり、郊外に住む若者たちをも巻き込んで大規模に拡大していった、CPE(初期雇用契約)反対運動は、そうした反植民地運動と反グローバル化運動を結ぶ連結符を力強く表現するものとして捉えることができるだろう。別の言い方をすれば、それら二つの動きは、共通の敵(シラク政権下で押し進められた新自由主義的構造改革がもたらした雇用の不安定化や福祉システムの空洞化、社会的・人種的排除)に対して共闘するばかりでなく、新しい社会的諸関係を構築するという共通のプロジェクトのために協働することは可能だろうか、という問いをみずからに対して、またより広く開かれたかたちで提起していると考えられる。そして、マルチチュードの概念は、この問いに孕まれている可能性を肯定的な仕方でも探究することのできる、理論的かつ実践的な試みと不可分の関係にある、と言えるだろう。
- 29) Antonella Corsani and Maurizio Lazzarato, “Le revenu garanti comme processus constituant”, in *Multitudes* 10, Éditions Amsterdam, 2002. ([http://multitudes.samizdat.net/article124.html?var\\_recherche=corsani](http://multitudes.samizdat.net/article124.html?var_recherche=corsani))
- 30) プレカリアートをめぐる論文や文書は多数存在するが、一つの見通しのよい入り口として、伊藤公雄「聖プレカリオの降臨——イタリアにおけるプレカリアート運動をめぐって」、『インパクション』151号、インパクト出版会、2006年、10-18頁を参照。
- 31) ポスト・オペライズモの研究者やアクティヴィストたちによる「保証所得」の概念をめぐる理論的・実践的な介入の軌跡とその最新の展開については、さしあたり、*Multitudes* 誌第27号 (*Multitudes* 27, Éditions Amsterdam, 2007) の特集「生経済・生政治・生所得——保証所得をめぐる開かれた問いの数々」に寄せられた諸論考を参照。
- 32) 「生所得」に関するより詳細な分析については、Christian Marazzi, “L’Amortissement du corps-machine”, *Multitudes* 27, Éditions Amsterdam, 2007, pp.27-36を参照。
- 33) Virginia Woolf, *A Room of One’s Own*, Penguin Books, 2004, p.103. (ヴァージニア・ウルフ『自分だけの部屋』川本静子訳、みすず書房、1999年、159頁)
- 34) Antonella Corsani, “Beyond the Myth of Woman: The Becoming-Transfeminist of (Post-) Marxism”, *SubStance* #112, 36 (1), University of Wisconsin Press, pp.127-128を参照。
- 35) Woolf, *A Room of One’s Own*, p.37. (ウルフ『自分だけの部屋』, 56頁)
- 36) Antonella Corsani, “Quelles sont les conditions nécessaires pour l’émergence de multiples récits du monde? Penser le revenu garanti à travers l’histoire des luttes des femmes et de la théorie féministe”, *Multitudes* 27, Éditions Amsterdam, 2007, pp.43-55を参照。
- 37) Gayatri Chakravorty Spivak, *Death of a discipline*, Columbia UP, 2003, pp.43-44. (G・C・スピヴァク『ある学問の死』上村忠男・鈴木聡訳、みすず書房、2004年、73頁)
- 38) *ibid.*, p.46 (同訳書、77-78頁)
- 39) Woolf, *A Room of One’s Own*, pp.111-112. (『自分だけの部屋』, 172-174頁)
- 40) Spivak, *Death of a discipline*, p.35&p.50. (スピヴァク『ある学問の死』, 58・85頁)

